The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ドゥルーズと美学 |
| Author(s) | 前田, 茂 |
| Citation | 大阪大学, 1998, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.11501/3143711 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 前田　茂（まえだ　しげる） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（文　学） |
| 学位記番号 | 第　13597　号 |
| 学位授与年月日 | 平成10年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当<br>文学研究科芸術学専攻 |
| 学位論文名 | **ドゥルーズと美学** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教授　上倉　庸敬<br>（副査）<br>教授　神林　恒道　　教授　森谷　宇一　　教授　鷲田　清一 |

## 論文内容の要旨

「はじめに」によれば，本論文の目的はフランスの哲学者ジル・ドゥルーズ Gilles Deleuze（1925-97）の「哲学が美学にどの程度まで応用できるかどうかを検証すること」である。そのために「第一部」では，「ドゥルーズの思想を通底している，少なくとも一つのモチーフを摘出」することが試みられ，そのモチーフから生みだされた「数多くの魅力的な概念」が明らかにされる。「第二部」では，「そこにあらわれた諸概念の美学への応用可能性が推し測られる」。本文は45字×44行×83頁，400字詰原稿用紙に換算しておよそ410枚，「目次」1頁と「参考文献一覧」2頁がそれぞれ冒頭および末尾に附されている。

「第一部　理論の弧」で明らかにされるモチーフは，ベルクソンの哲学である。ベルクソンの「直観」という概念を，ドゥルーズがどのようにして自家薬籠中の方法としていったか，そのプロセスが探られる。

ドゥルーズは「直観」に4つの契機をみとめ，それを方法論へと転位する（「第一章『ベルクソンの哲学』，方法の発見」）。

たしかによく言われるごとく，直観概念の批判的な継承にはニーチェのモチーフが絡んでいるが，それは，ふつう説かれるところとは違って，「力」の考察に関してであった（「付論一　『差異と反復』における二つのベルクソン批判」）。

方法を実践するなかで，ドゥルーズはベルクソンの射程を乗り超える。『シネマ』というイマージュの分類学は，ベルクソンがあいまいなままに残した仕事，すなわち生命論から逆に認識論へとさかのぼること，その試みにほかならない。存在論の視点から，映画のイマージュをベルクソンのイマージュと重ね合わせたドゥルーズは，「生命の進化をあつかう手つきで，もろもろの認識を分類」したといえるだろう（「第二章『シネマ』，方法の実践」）。

ベルクソンのモチーフにライプニッツのモチーフが交錯する。表象される世界と，それを表象するモナドのあいだには，そして諸モナド相互のあいだには，いささかの隙間もない。それ自体であり，また世界であるモナドの体系が，イマージュの体系と応じあう。無限集合として，モナドもイマージュも，一種「内在性の平面」とよぶべきものを形づくっている。だが，それだけではない。そうした絶対的な内側と外側とが接触するところ，そこからイマージュは思惟の記号を生みだし，モナドはみずからの思考をくりひろげる。接触すること，考えるという営みは，すべてに潜在する差異がおりたたまれた「襞」から生じる。すべては「襞」である。ベルクソンのモチーフは，「襞」という基礎概念を構築するにいたる（「第三章『襞』，基礎概念の発見」）。

ベルクソン哲学のモチーフから生みだされた諸概念，美と芸術をめぐる思索の諸分野に，どのように応用されたか，また応用できるか。「第二部　美学的な局面」はそれを考察する。

芸術作品は「直観＝創造を体現しつつ誕生する新しい個体」であるが，それは「可感的なフォルム」を現前させる精神的モナドであり，「感覚 sensation」であると，ドゥルーズはいう。その実在化は「絶対的に新しいものたちの＜存在論的な反復＞」にしたがう。ここには，ベルクソン，ライプニッツ，そしてニーチェの思索，それぞれのアポリアを回避して，たくみに融合した芸術学の可能性を見てとることができる（「第四章　『フランシス・ベーコン』，個体としての芸術作品」）。

こうした芸術作品は，さまざまな表象からみずからを解き放つと同時に，鑑賞者にたいしても，その表象体系を破壊し，もろもろの力との直接的な関係をとりもどさせるだろう。カントもまた，形式ではなく生のままの物質へ向かう反省的判断力に，諸能力の自由な一致の根拠を見出している。だが一方でドゥルーズは，現代映画においては感覚－動力図式は内側から破壊されており，そこに「崇高」を期待することはむずかしいと，指摘している。カントをのりこえる現代的な美学の可能性は示唆されるが，社会現象への解釈および歴史の記述以外のところに，ドゥルーズの現代美学の可能性を見出すことは，いまのところ困難であろう（「第五章　崇高の変容，状況の変化」）。

しかし，美学と芸術学という2領域の統合は，ドゥルーズにしたがうならば，不可能ではない。「内在性の平面」に立ちもどってみよう。その「平面」ではまず，物質と生命が分化して生命が全活動をひきうける。ついで新しい個体の創造がおこなわれ，さらには世界がもろもろの個体からなるカオスと化して，あらゆる思考活動が生まれるだろう。個体の創造は「感覚」をひきずりだし，思考の活動は概念をつくりだす。内在性の平面において，直観がイマージュという記号のもとに分類されていれば，感覚や概念など新たな個体の創造を包括的にあつかうことが可能となろう（「付論二　芸術学と哲学の境界」）。

ドゥルーズのいう芸術作品は，相互に，また人間と，どのような関係をもちうるだろうか。創造的進化はヘーゲル流の弁証法ではない。その所産は個たる多である。「思考せよと強いる」カオスである。それをドゥルーズは「記号」とよぶ。この記号は，現代芸術の理論家アーサー・ダントーの語る「芸術作品」に通うものがある。つまり「みずからの歴史（美術史）と文脈（アートワールド）を自己反省する個体」である。みずからのうちに＜解釈傾向＞を内包するドゥルーズの記号論は，パースの記号に似ているが，それ以上に美術批評を基礎づける本質的な方法となるであろう（「第六章　記号，真に伝達するもの」）。

こうして，ベルクソンを中心とするモチーフから導きだされた諸概念の，美学とその隣接領域における有効性が計量され，「ドゥルーズと美学」のあいだの関係が明らかにされた。

## 論文審査の結果の要旨

本論文のかなめは，ドゥルーズの大著『シネマ』にまったく新たな読解をほどこした第1部第2章にあることを，まず指摘しておかねばなるまい。これまでふつう『シネマ』にたいしては，ある体系をそなえた哲学が，映画というあたらしい表現媒体にはじめて真っ向から取り組み，だれも思いつかなかった位置づけを果たしたと，評されてきた。哲学が，誕生したばかりの映画に，いわば箔をつけてくれたという評価である。

申請者は『シネマ』を，ドゥルーズが初期から模索してきた一つの方法の全面的な展開と，読み解いている。映画がドゥルーズを必要としたのではなく，ドゥルーズが映画を必要としたという次第であろう。この思い切った見とおしは，長年にわたって精密な「『シネマ』読解」を積みあげてきた成果である。この大著はドゥルーズの哲学全体のなかで，ようやく正当に位置づけられることとなった。

実際，本論文を読んではじめて，「本書は映画史の試みであるとともに，博物学の試みである」というドゥルーズの言葉が，従来，十分には省みられていなかったことに，気づかされる。そうした「読み」は，映画に造詣のふかい哲学者であるか，哲学に造詣のふかい映画研究者でなければ，かなわなかったであろう。申請者はどちらかといえば後者であって，その芸術にたいする幅のひろい視野は，第2部で過不足なく具体化されている。

ドゥルーズの哲学から美学思想をそれ自体として剔抉できたことは，当然，本論文の長所であるが，このことがも

つ意味は，ここで論じられている以上に大きい。本論文によれば，ドゥルーズが可能性として秘めている美学は，ベルクソンのモチーフとライプニッツのモチーフが交叉するさきに展開するとされている。ライプニッツにせよベルクソンにせよ，その思想がいかに美学に貢献できるかという研究は，いままでどれも痒いところに手のとどかぬ憾みがあって，説得力においても有効性に関しても，不十分であった。本論文は，ドゥルーズの美学の可能性を保証する過程で，ライプニッツとベルクソン，さらにはスピノザの美学の可能性までを，端緒なりとも，切り拓いているといえよう。そうした哲学のどの糸をたぐれば美学へ移行させうるか，本論文はドゥルーズをとおして，それを試みていると評価できよう。

ドゥルーズにおける美学の可能性を明らかにしようと性急なあまり，あまりにドゥルーズに即しすぎているのは，本論文の短所である。たとえばドゥルーズによるカント批判をそのまま受け容れて，カントについて申請者みずから考えることなく，議論をすすめている。そのため，美学史のなかでドゥルーズが客観的に位置づけられていないという結果をまねいている。だが，そうした問題への答えは，今後のつとめとして，十分，申請者に期待することができると，審査委員会は判断する。

以上の審査と判断をへて，本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。